

諺
紳

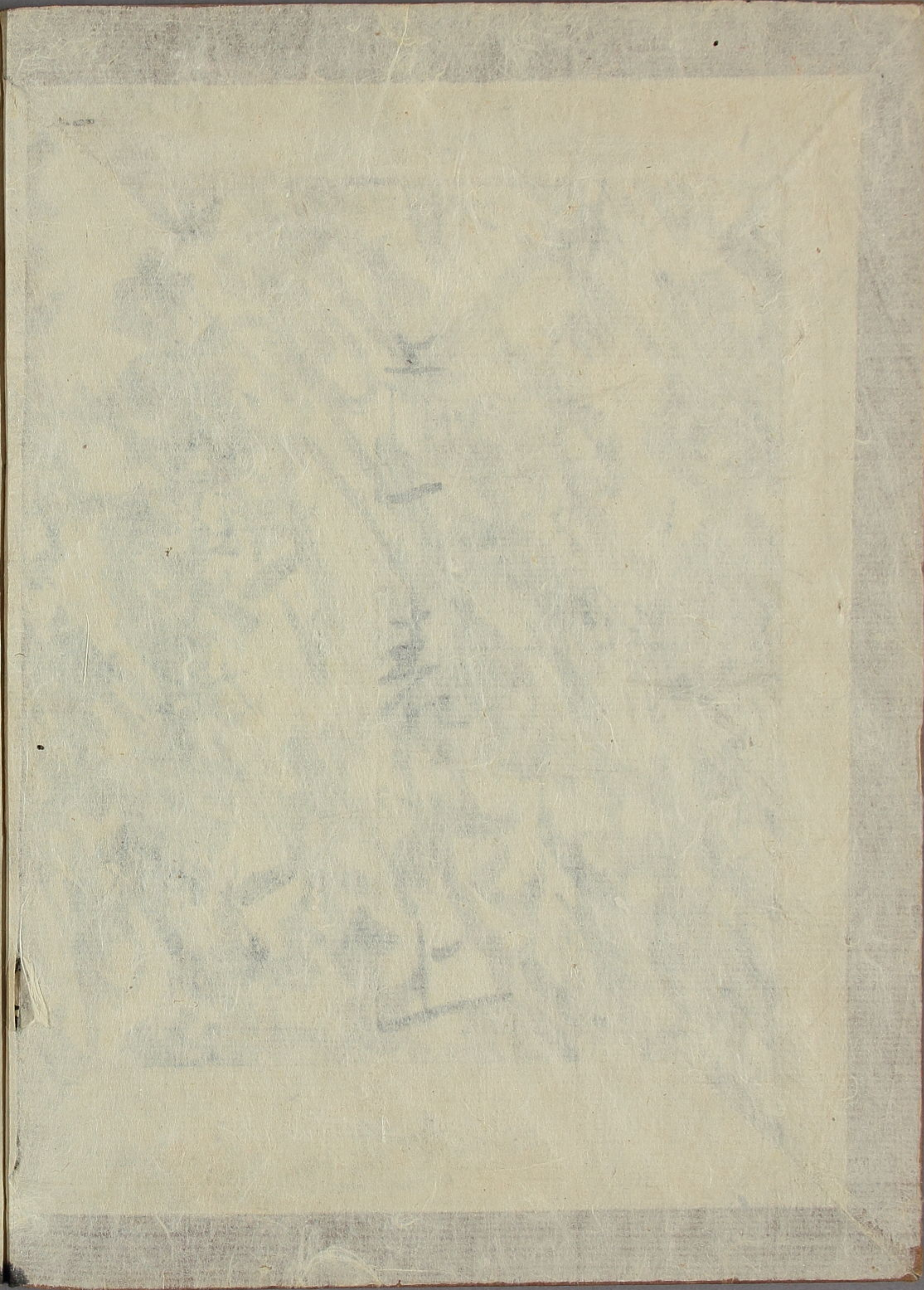
一之三

自
至
加

4
775
252



822
177



4
776
252

真山居士印

慢爾野語群疑發聲

文彦 丑 卅

稗今俚言舛譌雜定

彥單序

あもをきよめりり乃れ能と文字
さるあまのちをさししとて
爾雅よりあるをほつて
人山きづきあはれもかた
いもいもまよか
又字解して解りたを
なび皆ををいぬ

諺草凡例

一 以編心志を公之海の類と云ふ事。童蒙の
 母を以て思やせられいらはの文字と門
 一 次は俗語を去りて次はあやまり唱る
 詞と云ふは。此類法師がな文字にひとや
 ぐうていおとれは念のた一はよき法一と
 一 今明魏法師はなうなる事なりと云
 一 考らるるは。此はあやまりいね
 一 世法の正と云ふ事なりと云

おふとやうに刊別しつゝあつてきつりな
れなく得失詳略をまゝにあらはし今思見と
らうと是をとり北沢拾遺を思ひかのみと
記すし申すは中世よりちかむりありとよ
くまふと文と云へてこれと云ふは入假名の
みよとくくくく考加ふるをいふ條下は
明新考と細せん哲院の人の眼には著意
にあらざるをいふとされしやと校誦の本
をもとにせしむらわらうと記すし半と云ふは
一巻のあつた後詳略をわたりしとあり
まはしとくくく出たてをいふはぬが洋
と云ふことあり

一 歌部より後述りゆへにこれ毎一冊あり
吾國の詞あり又傳とていふことありしは
希軍のありたれしと云ふはひらきしは
考ぬことありしやと云ふはわらへことあり
らるる者といふはつた作らるる傳らるる河をい
ふことありしやと云ふはわらへことあり
文記出所をいふことありしやと云ふはわらへ
ことありしやと云ふはわらへことありしは
つらとく人と云ふはわらへことありしは
日用よりいふはわらへことありしは
考へしやと云ふはわらへことありしは

諺州卷之一

貝原好古纂輯

大正二年一月廿日寄
中村楠雄氏贈



伊第一

諺

一字千金 漢書葦賈傳云諺云遺子黃金滿贏不

如一經是之一字千金乃之也 卿瑯代醉編二十六晉

朱伺曰不費勇而貴志比真一字千金其也 好古云

不尊傳云呂氏春秋布咸陽市門懸千金其上延諸侯游士

賓客者不能增換一字者予千金一字千金云事ハカクイ

伊 俗 日 向 物 俗 日 向 物 俗 日 向 物 俗 日 向 物

乃高千穂穂觸の奉よつります乃下 吾ハ則伊

乃校去田み十鈴川上り 乃校去田み十鈴川上り

乃校去田み十鈴川上り 乃校去田み十鈴川上り

乃校去田み十鈴川上り 乃校去田み十鈴川上り

乃校去田み十鈴川上り 乃校去田み十鈴川上り

乃校去田み十鈴川上り 乃校去田み十鈴川上り

左傳昭公八年曰石言于晉魏

榆又晉劉曜傳云石言於陝日本紀曰葦原中國者

磐根木株草葉猶能言語千石也

風雅集雜詩云石言于晉魏

方仗の別當よりなりてゆるり

とやいふゆりゆりゆりゆり

とげきとととととととととと

返

山谷詩云萬言萬當不如一黙

一とんとんとんとんとんとんと

知明

素問四氣調神大論云夫病已

矢とととととととととと

成後藥之亂已成而後治之

不亦晚乎又說苑雜言篇云越石父曰人勿言也

猶渴而穿井臨難而鑄兵雖疾從而不及也

石を抱て別よ入る

而沉于河新考二程全書曰釋氏其實

故說許多譬抱石沉河以其重愈沉終不道放下石頭

惟嫌重也

并の中乃懐大海を志す

海抱於虚也

野措武者

なぐてをるの法と云

前漢書食貨志曰匈奴侵寇甚

名曰猪突豨勇服虔注云猪性觸突人故取以喻

名曰猪突豨勇服虔注云猪性觸突人故取以喻

名曰猪突豨勇服虔注云猪性觸突人故取以喻

了るや。是也と云く。魚と云く。何と云く。此の魚は...

痛り之腹さくも。い後のこ。万の事。人の教。未然不處嫌疑間。从田不納履。李下不正冠。其俗流。未任。類せり治く歌も。

海疆の改も信く。云。汝南。鄒陽有於田得麈者。其主未往取也。商車十餘乘。經澤中行。望見此麈者。繩因持去。念其不事。持一鮑魚置其處。有頃。其主往不見。所得麈。及見鮑魚。澤中非人道路。怪其如是。大以為神。轉相告語。治病求福。多有效驗。因為起祀舍。眾巫數十。帷帳鐘鼓。方數百里。皆來禱祀。號鮑君神。其後數年。鮑魚主來。歷祠下。尋問其故。曰。此我魚也。當

有河神。上堂取之。遂從此壞。傳曰。物之所聚。斯有神。言共獎成之耳。大のこ。鮑魚と神。信仰して。病と治く。夜をい。い。の。信。り。一。系。落。て。天。下。の。秋。事。物。乃。始。激。り。て。人。を。撈。乃。蓋。なる。と。知。る。之。信。執。を。鬼。子。執。を。父。之。一。粒。一。夕。の。あ。ま。い。に。せ。不。由。來。ま。久。し。を。得。瓜。子。一。年。一。さ。と。は。之。後。の。さ。も。せ。始。り。小。り。り。と。ん。と。ち。此。の。大。なる。と。思。や。淮南子曰。以。小。明。大。見。一。葉。落。而。知。歲。之。將。暮。睹。瓶。中。之。冰。而。知。天。下。之。寒。こ。世。治。の。始。る。石。白。菴。人。の。獲。能。多。は。た。枯。く。る。者。ハ。石。白。の。物。じ。て。礪。る。ら。ハ。な。し。と。思。を。く。る。者。ハ。石。白。の。物。じ。る。白。菴。と。し。り。周易正義引蔡邕勸學篇云。碩鼠

石白菴。人の獲能多はた枯くる者ハ石白の物じ。て礪るらハなしと思をくる者ハ石白の物じる白菴としり。周易正義引蔡邕勸學篇云。碩鼠

五能不成一技注云能飛不能上屋能緣不能窮木
能游不能度谷能穴不能藏身能走不能先人能坐
名曰能云云荀子云梧鼠五技而窮又俗云
少能文能物能走能格云云

石一む以 ありすし事の命なり 然もともるよの
むと云とれ何ぞ代醉編云慈利縣武口塞石上有花
如堆心牡丹枝葉繚繞雖精於畫者莫能及或以物擊
破其地拂拭之其花復見

一寸の地獄 俗云移くある行丁ると一寸の地獄と
云風ぬの花を移りて危き事なり
朝野僉載云乘船走馬去死一寸 後云云河の
河のうげ一河のうげ 一相の強くやう河の
流と汲と皆是地生乃縁と事昔白拍子の

いふはう徳りり地生し今生と云く 未生のやれ時
と云と今生に少くも云く

いふはう徳りり地生し今生と云く 未生のやれ時
と云と今生に少くも云く

一物ありハ一果と云 經組堂雜誌云頃年畜兩鶴既
之專人看顧朝放暮收不免關心又恐擾鄰圃驚童
兒羽翮再完一旦飛去自是遂有一事以此知有ハ一
物添一累也 新考

今年二十日 俗云又早れ始てあり 今案云
源氏物語 未だ書きしついでにありぬ
事ありありあり 俗説の云ハ奴婢れんてありぬ
ものよく云とついでてその人よとぬすこと

づう二十日むらりれるしそくきり及てなるは悔念
成之是後同分なり。奴婢の... 説苑敬慎篇云。官怠於寤
人の... 犬吠聲一人傳虛萬人傳實。古諺云。犬吠形千

俗語 慇懃

史記司馬相如傳。勲委曲貌。通作殷勤。韻會云。慇

依稀。依字。猶言髮髻也。會云。猶言髮髻也。依字。猶言髮髻也。會云。猶言髮髻也。

依

依字。猶言髮髻也。會云。猶言髮髻也。依字。猶言髮髻也。會云。猶言髮髻也。

因果

華嚴經云。舉果知因。譬如蓮花。方其吐葩。而果

具葉中。得當乃說。本之根在。河多もの。必を美を
阿り。人の物と遊て。今日害せらる。因果

因緣

法華經如是因。如是緣。名義集云。尼陀那。此

曰。因緣生曰。因。謂先無其事。而從彼生也。緣。謂素
有其分。而從彼起也。故因親而緣疎。
威儀。尤傳北宮文子云。有威而可畏。謂之威。有儀可

象。謂之儀。

安忍 尤傳隱公傳云安忍無親。祚代を小安忍といふ
リと訓せり

不審 此字韓詩外傳より。いふしと訓せり。
あふふあふあふ。あふあふあふあふと。いふしと訓せり。

早晩 鄭谷江際詩云。兵革未息。年華促。早晩聞吟。

印可 小菴を極むるを。即座を大なる言とあり。と

冥坐者佛所印可。維摩經曰。若能如是。

陰謀 元うりよとく。李德裕紀功碑云。公密賂其

否應 人の云事と。父用はると否と。後

遺恨 杜子美詩。毫髮無遺恨。朱子文集云。無復有遺恨。

逸興 杜子美詩。揚曹乘逸興。鞍馬去相尋。俗よ事れ

隱居 論語。隱居以求其志。今修ふ。南岳と云。後

石木 竹塲物。いしき。いしき。いしき。いしき。いしき。

時勢 野槌曰。白氏文集。新樂府。み時勢。極と云。

田舎 俗。この鄙の事と。田舎と云。柳宗元詩云。皇恩若許

盛稱 高祖儉素。帝曰。田舎翁得此。已過矣。田舎公。羽

々いなるもの也。此と。道都と。田舎と云。

季細 唐書季細參問

色 俗、女の事と云うて父と云。毛詩序疏曰。女有美

色。男子悦之。故經文通。女曰也。佛祖三經曰。佛曰。愛欲莫

甚於色。色之為欲。其大無外。

家畏 糸集小。栴乃也。云々。枝と云。乃て。畏と云。

つげ 糸集小。栴乃也。云々。枝と云。乃て。畏と云。

又都産乃字と云。乃。

行といくと云。乃糸集小。乃。立田山と云。

然といくと云。乃糸集小。乃。

糸 乃糸集小。乃。立田山と云。

乃 乃糸集小。乃。立田山と云。

一 乃糸集小。乃。立田山と云。

一 乃糸集小。乃。立田山と云。

一 乃糸集小。乃。立田山と云。

俗、飲食と云。このじ者といやと云。孟子曰。

飲食之人者人賤之。けし。指なと云。

石授子 ぬれと云。乃糸集小。乃。

い 乃糸集小。乃。立田山と云。

さ 乃糸集小。乃。立田山と云。

大 乃糸集小。乃。立田山と云。

三十一 乃糸集小。乃。立田山と云。

西行 乃糸集小。乃。立田山と云。

異口同音 首楞嚴經五卷小。乃。

一人當千 李陵答蘇武書云。疲兵再戰。一以當千。

史記趙世家。今三世以前。已前。集昌黎文序。

以前 史記趙世家。今三世以前。已前。集昌黎文序。

秦漢已前 史記趙世家。今三世以前。已前。集昌黎文序。

以後 宦者傳論。自明帝以後。已後。史記三皇本。

宦者傳論。自明帝以後。已後。史記三皇本。

紀人皇已後

以上 內則凡自七十以上

以下 孟子鄉以下。曲禮自世婦以下。孝經

云。自天下已下

以來 孟子自有生民以來。禮記檀弓自周公以來。

已來。史記三皇本紀三皇已來。秦本紀自

今已來。是の事と云ふ。此れと云ふ。已の事と云ふ。此れと云ふ。

一 才子傳不能一一盡之。山谷詩言行

一 宿 莊子止可一宿而不可以久處。

一 且 史記蕭何傳小也。

一 由旬 圓覺經小也。注云。一由旬則四十里。

云十六里。

一向 語錄解我云。一向正一直向也。

一般 又云。一般一樣也。

一 既 楚辭卷之四曰。一既而相量。注云。既平斗斛木

也。斗斛小大小小。一既也。大小。一既也。一既也。

一 體 莊子知北遊篇皆有所一體。口義云。一體猶一

本也。即一理也。

一 匹 前漢書藝文志云。布帛廣二尺二寸為幅。長

四丈為匹。六書正譌云。馬影四丈亦借用。曰匹。別

用足非。藝文類聚云。馬光景一足長。故曰足。事文

類聚後集云。顏回望吳門馬。見一足練。孔子曰。馬

也。然則馬之光景一足長耳。故後人號馬為一足。

或曰。馬夜行則目明。照前四丈。故曰一足。或曰。春

秋。充氏說。諸侯相贈乘馬。束帛為足。與馬相足耳。

今俗小牛羊犬豕の匹と云ふ。一足二尺と云ふ。此れと云ふ。此れと云ふ。

音信 山客詩故國音信斷音信ハレつまく俗人

而今之流俗遂以遺書餽物為信故謂之書信手信 俗人

違背 類經附翼云三千年來無敢違背

違犯 周禮全經云違犯命令

違却 物のちがひひらる半却ハ助字トテ忘却沽却

意趣 小學程伊川曰教人未見意趣必不樂學陳

負數 選云趣指趣也

醫驗 晉書云置其負數而已

色色 唐書云輕薄敦厚色也也有之

幾何 史記趙世家年幾何矣字彙云幾何問多少之

詎幾 又未多時物無多俱曰無幾

石戰 讎幾 歎逝賦彌年時其詎幾註詎幾無多也

牙 我牙となし。胎原と決し。其古昔陳法と習は。

半やぬ。邪し。半不。東國通鑑云國俗於端午時市

井無賴之徒群聚通衢分左右隊手瓦礫相擊或雜

又短柱以決勝負謂之石戰

挑戰 漢書項羽挑戰通鑑凡例云將戰必先使勇力

之士以犯敵謂之挑戰

諺

薄氷

戰戰兢兢如臨深淵如履薄氷

傳云戰也恐也

詩經小旻篇云

馬車東風

東坡集十二世間馬車射東風注李白詩云

世人聞此皆掉頭有如東風射馬耳

史記荊軻傳

新考

旁若無人

老子云夫物芸芸各歸其根

萬事皆空

若必相太宰府元龜

離家三四月

落落百千行萬事皆如夢時仰彼蒼

海鯨鯨之一物

杜詩孔丘盜跖共塵埃

法師

臺以臨殷民周公旦曰臣聞之愛其人及其屋上烏

憎其人者

憎其除足日此語云吳

八十之三象

漢書文帝紀曰七八十翁嬉戲如小兒

城洞潭

寢覺記云

俗語

無墓寢覺記云

方外

莊子大宗師篇彼遊方之外者也

母御

俗一人之母也

管公詩

閭巷稱辨御注云俗謂貴女為御蓋取

乃字

夫人女御之儀也

法式

莊子天下篇

戲慢乃云多々とのを俳諧と云

萬端 史記信陵君傳云賓客辨士說王萬端又陸機

歌云道雖一致塗有萬端

萬方 書經湯誥云朕躬有罪無以萬方

匍匐 詩經生民篇云誕實匍匐注兒以手行也史記范

睢傳蒲伏と何れも蕪秦傳も蒲服と云けり漢書

拔群 陸士衡謝平原內史表擢自群萃注向曰言

拔於群聚之中人よぬきんでしりし云る也

破滅 陳孔璋檄吳將校部曲文云破滅疆敵

末葉 漢書徐樂上書曰何謂土崩秦之末葉是也

文選辨亡論註良曰葉代也

末孫 漢書劉向傳雖有湯武之德不能訓末孫之桀紂

沛父 張平子東京賦よけり注良曰馬行貌今俗よ

驛 驛のよるいと云はる子の河人とのんとして

沛父と云と云はるいと云はる沛父と云るの

河と云り行と云るなりと云はるなりと云る

先と云るいと云はるいと云はるなりと云る

半死半生 朱子文集豈非所謂半生半死之虫哉

廢學 元史趙良弼傳人多廢學

流離の字ハ詩經よけり註云流

離漂散也

果行 俗事切の成と云るゆくと云ハ果行と云る

果行の字ハ易小の果と云る也蒙卦象云君子以果

行育德

半塗 中庸云君子遵道而行半塗而廢吾弗能已矣

破落離 此れ俗語多し飛落離不落離不破離

とや海に徳福のうらりかされ奉。今の世もくわあー又
修。北史隋中し云。小史笑をくしつ。つ。元帝の半
より能くつる。

人面獸心 人として仁義忠孝の心なく。然れども獣の心あり。人の

面を獸の心と云ふ。今人面獸心。同。と云ふ。班固

漢書賛云。夷狄之人。被髮左衽。人面獸心。新考

雞之。して。あ。の。ぼ。り。つ。と。さ。り。て。あ。入。

老學菴筆記曰。淮南諺曰。雞寒上樹。鴨寒下水。水

驗之。皆不然。有一媪曰。雞寒上距。鴨寒下背。謂

其味於翼間。新考

小くきとの。ハ。リ。け。て。え。よ。 友家の。所。方。よ。

い。乃。ち。が。か。い。き。れ。松。原。い。き。て。な。と。 新考

あ。く。ま。れ。み。せ。よ。つ。の。は。 五代史諺云。偏愛子。不保。

業。そ。今。乃。後。と。言。是。し。て。こ。同。 新考

俗語 忍辱 金剛經より。注云。能降嗔怒。これ

忽と止く。如に修ふとく。

人数 史記五宗傳。不以長子。祝為人。數上

若手 靈樞云。凡若手毒。為事善。傷者。可使按積。抑痺。

手毒者。可使試按龜。置龜於器下。而按其上。五十日。

而死矣。此も世より。苦多し。い者。芋乃。苦を。と。り。

其味苦し。又後の痛を。抑て。効あり。又蛇と。抑ふ。

甚多 俗よ。人る。じ。乃。多。く。集。り。つ。と。以。つ。と。云。

日本紀景行帝記。甚多と。少。さ。なり。と。判。せ。り。

是より。出。る。詞。なり。

香 俗よ。白の字。と。人。の。や。と。あ。り。誤。く。字。書。よ。

白と。薰。と。す。ら。乃。義。を。 藤原敦光對庭。

花詩曰。當戶濃。句含霜媚。入簾落。並帶風斜。濃
句と為。其對也。是之又。蓋香の氣とせり。此
の對。友家之傷の詩文。多し。皆わろくおせざるの

徳之

北

漢書高帝紀註師古云。北陰幽之處。故謂退敗
奔走者為北。又後漢書滅宮傳註。人好陽而惡陰
北方幽陰之地。故軍敗者謂之北。

任弱

物のよらざることを云。楚辭より。注云。任亦

弱也

傍

字彙云。偽物也。贗亦同。物のまよあすす
ゆる物と云。傍よりよらざるもの

保 第五

諺

不子れ河らん。韓文送水子愿
歸盤谷序云。與其譽於前。孰若無毀於其後。こと

新考

譽

譽りて。好面譽人者。亦好其毀之。
その面兼好つれ。單よほまれ。又その面兼好

為の後ろ名。河らん。文よ。益々

俗語

褒美。漢書鄧禹傳。帝數賜書褒美。

鋒起

本作逢螭起。史記項羽記より。注如淳曰。逢螭
起猶言逢螭午也。衆螭飛起。交橫若午。言其多也。又

漢書高祖紀。盜賊鋒起。注或作蜂起。後漢書光武

記。寇盜鋒起。注言賊鋒銳競起。或作蜂喻多也。

噬齋

若不早圖。後君噬齋。杜注。若嚙腹齋。喻不可及。
抱乃及ぬ事。吟。後物と云。尤傳。莊公六年云。

本望 隋書云。漢牟本望。

矛盾 抱此すりちがひする事と云。修しん志ん 韓

非子云。人有鬻矛與盾者。譽其盾之堅。物無能陷也。俄而有譽其矛曰。吾矛之利物無不陷也。人應之曰。以子之矛陷子之盾。何如其人弗能應也。乞

隋 楚辭註。朱子曰。狹而長也。亦作

竇 字彙云。口滿食俗。頰張し云乞之

彷彿 楚辭遠遊篇云。時彷彿以遙見。朱子註云。

見不定也。亦作

本末 大學曰。物有本末。

正譎 行器るる。木履少く。綻少く。頰る。け

疹 疹る。放。下。誤

諺 蛇は足有り。魚は耳有り。淮南子云。鬼絲無根

而生。蛇無足而行。魚無耳而聽。蟬無口而鳴。○代醉編

三十九。朱翌云。畫蛇者足無用處。為蛇畫足。見戰國策。

與史記。按本草。蝮蛇陶隱居注云。蛇皆有足。燒地令熱。

以酒沃之。置中。足出。因陽雜俎云。蛇以桑柴燒之。則見

足出。曲江老兵捕一蛇。燒之。四足無出。如雞足狀。この

蛇の如き蛇。蛇は足有り。蛇は足有り。蛇は足有り。

亦名水の流る。見ハ晋郭象ガ本より

晋書列傳二十。郭象字子玄。少有才

理。好老莊。能清言。大尉王衍每云。聽象語。如懸河

瀉水。注而不竭。新考

俗語 折。修。物と分ち奪ふと云。つと云。い字る。下。日本能十九。折の字とへり。ると訓。と。乞

多うする

平生 論語より。朱子曰。平生平日也。

辟易 漢書項籍傳より。師古云。辟易。謂開張而

易其舊處。又通鑑集覽云。辟易。驚却貌。

偏傍 又字の偏傍。晉書云。王右軍書多不講偏傍。

偏頗 書經。洪範。毋偏。毋頗。遵王之義。中宅富貴無偏。

顯史記註。偏不平。頗不正。

下手 下より上より。今ハ法蕪る。而一と云ふ。良醫

改てり。今ハ法蕪る。而一と云ふ。良醫

る。今ハ法蕪る。而一と云ふ。良醫

辨口 俗に口有とのと云。史記。范雎傳。齊襄王

聞雎辨口。又朱建傳云。為人辨有口。

辨說 宋史云。辨說之士。

藝道變化

變化 易係辭云。擬議以成其變化。

表裏 北史。宋世軌為廷尉。少卿。蘓軫之為正守。

中語曰。決定嫌疑。蘓軫之視表。見裏。宋世軌。今

俗人の俗を。事乃決定。やめと。表裏も

傳燈錄。玄沙傳。雪峯召曰。備頭陀。何不編參

朱子文集云。別紙示及。

別紙 莊子。顏淵曰。夫子辯亦辯也。夫子馳亦馳也。

正譎 屏重門。返事。下手。

屏重門 返事 下手

返事 下手

下手

本我變者化漸化音變之成

土 第七

諺 いさよめ御代 史記云子產為相三年門不關道

不拾遺 新考

同氣相求 易文言曰同聲相應同氣相求 吳越

春秋云同病相憐同憂相救 新考

世之用 孔子の大聖あり七十竹園と況之りて流

而大雨枯槁無所用則又還為益焉未幾而盜起民

盡改戎服鮮有用益者欲學為兵則老矣

不用則為鼠 漢書東方朔傳云用之則為虎

此風 鼠と虎と 漢書東方朔傳云用之則為虎

不用則為鼠 このことを新し

虎 虎と用られむむる今鼠はあらず世乃

老人の子 風俗通云老人子無影

同 同家

論語子貢曰貧而無諂富而

無驕何如子曰可也未若貧而樂富好禮者也

列子仲尼篇口義云燈將滅

者必大明

を月 を月

形 形

森 森

...

...

...

...

何れと云ふらるれば、さふもるは、人々、さうもて
つらありとらるる。このこと、なして、世に、同じく、さうもて
もの、さうもて、さうもて、を、目、さうもて、の、さうもて、と、云

問

一旦の恥、ぬ、一朝の恥、読のさ、凡人、必、之、覺、の人、は、

常、同、ぬ、辨、せん、い、なん、ぞ、と、く、道、と、さ、らん、ぞ、と、云、れ、

少人、一旦、同、本、と、心、て、一、け、の、恥、と、抱、く、と、中庸、子曰、

舜、其、大、知、也、與、舜、好、問、而、好、察、邇、言、論、語、云、子、入、大

廟、每、事、問、注、尹、氏、云、禮、者、敬、而、已、矣、雖、知、亦、問、謹、之

至、也、か、く、大、智、の、常、孔子、云、問、と、知、終、く、後、生、悦

進、な、ん、ぞ、回、り、を、恥、づ、さ、

泥

泥、中、の、蓮、維、摩、經、云、早、涇、淤、泥、乃、生、蓮、華、周、茂

叔、愛、蓮、說、曰、予、獨、愛、蓮、之、出、於、泥、而、不、染、濯、清、漣、而

不、妖、中、通、外、直、不、蔓、不、枝、香、遠、益、清、亭、心、淨、植、可、遠

觀、而、不、可、褻、翫、焉

新考

奉、ん、も、り、の、さ、う、も、て、い、ま、ぬ、ん、か、い、何、く、さ、う、も、て、と、云、ひ、く

彪

彪、く、そ、う、け、ハ、風、さ、く、易、文、言、云、風、從、虎、淮南子

云、虎、嘯、而、谷、風、至、龍、舉、而、景、雲、属、王子淵、聖、主

得、賢、臣、頌、虎、嘯、而、風、冽、新考

虎

虎、の、尾、を、む、ふ、書、經、君、牙、云、心、之、憂、危、若、踏、虎、尾、新

月、は、集、の、の、ゆ、の、け、く、た、り、の、ま、り、の、さ、う、も、て、の、尾、を、て、た、り、の、

セ、ち、が、な、る、う、む、詩、小、苾、傳、古、語、云、鷦、鷯、生、鷗、そ、と、云、る、

さ、う、も、て、い、ま、ぬ、ん、か、い、何、く、さ、う、も、て、と、云、ひ、く

さ、う、も、て、ハ、風、吹、曲、禮、曰、前、有、塵、埃、則、載、鳴、也、鳥、註、云、鳥、鳴、

則、將、風、

智、の、さ、う、も、て、の、蝙蝠、

俗語

常、石、堅、石、古、事、紀、よ、出、り

同行

俗、に、神、社、に、余、訪、む、人、は、ひ、め、女、と、呼、び、て、回、り、と、云

あつて、韓退之の詩、同行三十人と心より

塗炭 書經仲虺之誥云有夏昏德民墜塗炭註云夏桀

闇亂不恤下民民之危險若陷泥墜火無救之者

貪欲 法華經云諸苦所因貪欲為本張平子東京賦

滌號餐餐之貪欲

得以 僧貫休詩云一餅一鉢垂老萬水千山得

得來東坡詩云知是多情得來今俗小物のゆる

やうなるものことと云はるる云は字なり

又すもやうなる本と云はるる疾の字なり

得ハ考を疾ハ訓と用也

獨身 史記司馬遷報社少卿獨身孤立又伍子胥

傳より

と云はるる疾ハ訓と用也

後今もいふ心なきと云はるる疾ハ訓と用也

徒然 字彙云徒但也俗小字寂しくなり

宛角 宛角の字、李白詩所向非徒然

空水陸飛行諸所物象各為一切汝不著者為在為無

く則同於龜毛宛角云何不著名義集云大虛水月竝

喻體空宛角龜毛皆況名假六祖檀經云離世覓菩提

恰如求宛角智度論卷一云如宛角龜毛常無

取捨 日本紀の訓あり、新集集よりたた字と

等閑 錢起歸鴈詩瀟湘何吏等閑歸と心より、疎

吹牙るさへ、今俗、沙んじりりりりと写楽と云

取捨 日本紀の訓あり、新集集よりたた字と

等閑 錢起歸鴈詩瀟湘何吏等閑歸と心より、疎

吹牙るさへ、今俗、沙んじりりりりと写楽と云

漢書高帝紀云斬以徇注師古云徇行示也司馬

歷問 日本紀より

響 糸系集より

教の字

字彙云歌聲又方言修多物の成教

無動 漢氏帝より

秋林良材云初の字

中庸遯世不見知而不悔

後漢書賈復傳陵折等輩

詩經杜篇豈無他人不如我同姓

易大過云棟梁之吉

易繫辭云二人同心其利斷金

同心

貪著 法華經貪著利養又修んといふこと

貪入り

同列 史記伍子胥傳より

東西 鶴林玉露云世に仙道といふと乃遠東と云佛を

云よの天竺といふ遠東といふ天竺といふ西に拘朴子云

判より日出処をみて是れ大平地といふ佛の西方

と云く極樂世界といふ太平極樂といふ東方と好す古

より戦争とあふり何れも東西と云幸希く或人羅氏が

之と述べて云修し相撲の見場の強弱と下記する何東西

と云く云て句をいふと戦争の方と趣はなり以前の所より

宿直 文選謝靈運詩題註直禁中より宿して非常は侍

と云く何れも世俗といふ

徇 漢書高帝紀云斬以徇注師古云徇行示也司馬

法曰斬以徇言使人將行徧示衆士以為戒俗も觸也

丁と云々、あ、徇也 （レ）

逗留 漢書元后傳畏懼逗留又逗留の字ハ後漢書

失圖 左傳昭公七年云悼心失圖俗ハこゝろと失ふ

閔 孟子註閔聲

啗 說文云弟生也公羊傳云弟失國曰啗又作啖

弔 說文云从人持弓徐云弔夷當有助故从人持弓

六書正譌云別作吊弔並非 （レ）

斗既誤 （レ）

正譌 斗既誤

斗既誤 （レ）

斗既誤 （レ）

斗既誤 （レ）

斗既誤 （レ）

諺草卷之二

知第八

諺 塵積成山 說苑曰土積成山則橡樟生焉

學積成聖則富貴尊顯至焉 大戴禮云積土成

山風雨興焉積水成川焉蛟龍生焉 考古今集の

序云云 （レ）

韓詩外傳云貪物而不知止者雖

有天下不富 新遺教經云知足者雖富而貧

朝野僉載曰人貧知短馬疲先

長 又古諺曰福至心靈禍來神昧 新考

史記韓信傳廣武君云

智者千慮必有一失愚者千慮必有一得故狂夫

之言聖人擇焉 新考

忠不忠なる事 漢書鄒陽曰王人獻寶楚王誅之李斯

竭忠胡亥極刑この執利漢は多し今も今も 遼あり

忠臣二君つらえ 王蠋曰忠臣不事二君王蠋は魯國の人也

血と血を洗ふ 唐書源休傳云可汗使謂休曰汝國已

殺突董等吾又殺汝猶以血洗血汚益甚爾新考可汗は

源休は唐の使着たる 突董は

中流一船一千金新考 鵬冠子云中流

失船一壺千金新考

竹の友切竹乃友と竹乃友と竹乃友と世説云晉殷浩既

廢桓温謂諸人曰小時與之共騎竹馬我弃去已而浩

輒取之故當出我下新考 又後漢郭伋并州乃判又

書叙指南曰

七歲之戲曰竹馬之戲

長者の子燈より貧女の一籠 阿闍世王受決經云貧女

一燈長者萬燈と云るのゆゑ也

地獄とす荀子云越人安楚之れと人の

くを後不とあんをかるとしり流のさと同新考

附 丁子頭 修一燈花と丁子頭と云丁子小似る小なり也

丁子頭とてハ善瑞之を信ふ事文類聚云樊噲問陸賈

曰自古人君受命於天云有瑞應豈有是乎賈云目睨

得酒食燈花得錢財乾鵲噪而行人至蜘蛛集而百吏

喜小既有徵大亦宜然又丁子頭とてハ早一百草霜

よ火照すれハ為晴と云蕪子瞻秋陽賦云金星之雜

出又燈花之雙懸奴婢喜而告予曰此雨止之祥也

俗語 重寶 戰國策云懷重寶者不以夜行又史記

周不記よとて唐の書に云く

珍重 朱子感興詩云珍重無極翁性理大全注珍重賛

美之詞とあり又僧史略云臨去辭曰珍重者何此則相見既畢情意已通囑曰珍重猶言善加保重也

張本 これハあハ切要なりと云て後ハいふべしなりと云て
云豫爲後地曰張本
左傳隱公五年傳注曰凡てことり書言故事

停止 梁書云便可自今停止

中絶 朱子文集云中絶不聞此等語

近者 曹子建七啓より○問者 漢書文帝紀より

○乃者 漢書昭帝紀より○頃者 報孫會宗書より

遲速 左傳云剛柔遲速高下出入

恥辱 論語より心ふとつるを恥と云人よりつる

中間 俗小志と云と中ると云友と若すと云中ると云

畜生 俗ハ此ハ不義の者と懸して畜生と云禮記云鸚

鵡能言不離飛鳥猩猩能言不離禽獸今人而無禮

雖能言不亦禽獸之心乎史記秦本紀云人頭畜鳴

正義曰胡亥人身有頭面目能言語不辨好惡若此

畜之鳴○涅槃經云身雖大夫行同畜生乞時俗流の

知音 又西遊記隋文帝煬帝此南洋と云と云

善聽 伯牙鼓琴志在登高山鍾子期曰善哉哉

若泰山志在流水鍾子期曰善哉洋洋兮若江河伯

牙所念鍾子期必得之云呂氏春秋曰鍾子期死

伯牙破琴絕弦終身不復鼓琴以爲無足爲鼓者疎小

伯牙と鍾子期ハ知者なり也今の俗男女交遊のり

云と云同んじ河をれハ義通下人

冬琴の意をさしける人けりまゝ今ぞまゝをなするべし

地形 史記秦本紀よきり

最爾 日本紀の訓をり少小の字をどしちいふとむ下

逐電 王子淵聖主得賢臣頌追奔電逐遺風とあるは

るの強きなりと云た人のしげくくつて流るる

とと逐電と云くぬん

智慧 孟子公孫丑云齊人有言雖有知慧不如乘勢

○老子經云智慧出有大偽王介甫註云智者知也

慧者察也又名不集摩法師云決定審理謂之智造

心分別謂之慧韻瑞云慧通作惠

地 國語越語よきり

持 款合の町るゝある同くて持負なりと

重半 奇偶の教るるこ

重疊 宋玉高唐賦重疊增益又羽佳方進傳よきり

とてめりく俗よ物の事とてまゝしるるを

ゆゑに俗よとて事とてへるハ誤

長技 前漢書晁錯傳匈奴之長技三中原之長技五

廣韻技藝也又方術也俗よ物と深之るとて

云ハ調議の字

督 說文云適目也

中央 詩經蒹葭篇宛在水中央

遅 俗よ車力のむくよなること遅くゆくと云孟

子云孔子去魯曰遅く吾行也去父母國之道也

中途 晉左思詩出門無通路枳棘塞中途

智畧 史記田叔傳褚先生曰今取富人子又無智畧

文選王元長策秀才文湊其智畧

中興 漁隱叢話云執云死云凡王室中微而復興謂之中

留 第十一

諺類云。易繫辭云。方以類聚。類之類也。類之類也。

易繫辭云。方以類聚。類之類也。類之類也。

俗語流浪。陶淵明集祭從弟敬遠文。流浪無成。

留守。史記呂后本紀。呂后年長常留守。希見上。留

守。唐制。車駕不在京。則置留守。唐李晦為西京

留守。斐度留守。東都。宋紹興八年。召呂頤浩

付以建康。建康。今南京。是。知建康者。曰建康留

守。守。也。又云金陵。天子出御

乃西。守。也。又云金陵。天子出御

乃西。守。也。又云金陵。天子出御

乃西。守。也。又云金陵。天子出御

乃西。守。也。又云金陵。天子出御

遠 第十二

諺。遠者久。年久物微。久而久之。

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

不可久也。老子曰。自教者不長。希逸註云。不長

材也... 女以夫家為家... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
女之のより用へし... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
婦人口不可用... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
御嶺の座をえ... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
事文類聚云魏萊公為相... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
飲都堂... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
親為宰相拂髮耶... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
御嶺... 史記陳平世家曰鄙語曰兒
者亦好背而毀之... 史記陳平世家曰鄙語曰兒

女以夫家為家... 史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

史記陳平世家曰鄙語曰兒

白玉蟾集雲遊歌云初到家山辭骨肉腰下有錢三

百足

汗面 俗小恥辱と云うなり。汗面は汗の面なり。俗小恥辱と云うなり。汗面は汗の面なり。俗小恥辱と云うなり。

嗚呼 俗小恥辱と云うなり。嗚呼は哀れむの聲なり。俗小恥辱と云うなり。嗚呼は哀れむの聲なり。俗小恥辱と云うなり。

云奉之 俗小恥辱と云うなり。云奉之は云ふに奉るなり。俗小恥辱と云うなり。云奉之は云ふに奉るなり。俗小恥辱と云うなり。

野槌と云ふ。嗚呼と云うなり。野槌と云ふ。嗚呼と云うなり。野槌と云ふ。嗚呼と云うなり。

志れよのなんと云ふ。或は云ふ。嗚呼は本嶋憐乃字なり。

嶋憐乃國の名なり。俗語として。西変りたり。其の音も父

兄人よ教ふるも。そは仇と被んとく。そはこれなり。其の音も

約て他人もくと。そはをさる者と打教ふ。是よりなり。其の音も

らく。勇めるものを嶋憐の者と云ふ。好古坊す。其の音も

此の日本紀才十。仁徳天皇の御教ふ。于古と何處ハ本

邦に代りたり。や。初嶋憐乃國の事と云ふ。初嶋なり

穩便 朱子文集未爲穩便

卸 增韻舟人出載亦曰卸。荷物と云ふ。此と云見

餽餘 曲禮云。餽餘不祭

大率 史記平準書。出たり

送越 ところろ。そは。友家の出たり

不凡 不凡。そは。其の音も。其の音も。其の音も。

之依り。此と云。其の音も。其の音も。其の音も。

正論

御主 御主。おの。わぬ。遠近。あちこち。已。おどれ。御首。おどろ。ハ

御乳人 御乳人。おち。い。狼。おち。い。教。おち。い。自。おち。い。

偽引 偽引。おち。い。重。おち。い。

和 諺

傳玄口銘曰從口入禍從口出

孔子家語云口是何傷禍之門也

揚子雲曰言輕則招憂文中子曰禍莫大於多言

禍と招く 左傳曰禍福無門惟人所召

老子云禍兮福所

倚福兮禍所伏

錦と鍼とつむ 小人乃文外と人ごりの根とつむ

口頭交吐裏生荆棘錦と鍼とつむと云語也 孟郊詩云結

和光同塵 老子經曰和其光同其塵

あうく隠く 和光と云世に混ひ塵俗の

中混れし時を知ると同塵と云

論語曰己所不欲

勿施於人俗の義と云同 新考

韓子曰古之人目短于自見故

以鏡觀面智短于自知故以道正己

新考

和 教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

和の教 和の教 和の教

私シ 韻府賤私某也。儀禮家臣稱私。

若ニ 韻會云。今人謂弱為若。按曲禮二十曰弱。

割符ワ 韻會云。說文符信也。漢制以竹長六寸分而相

合。从竹付聲。司馬遷云。遷之先非有割符丹青之功。

あれよりの時を割符と云く能く一符と云く行をぬ

一より各一と云るは時をよむを令く能く行をぬ

漢文帝二年。邦國皆以竹。洞底符を以て

めく。邦師のりよゆふ。これと若すと分て太く邦師の

さめたるハ邦師ふらふ。史記漢書小何也。帛より

少く邦師く分と符と云。漢書終軍傳注よ何也。

修小割符と云も是木乃律より起るの理也。

楚辭。余侘傺兮。王逸注。失志貌。

孟子離婁篇云。其待我以橫逆。

理もさうく邦師のりよゆふ。修小割符と云。韻會云。

宅ノ 楚辭。余侘傺兮。王逸注。失志貌。

枉カ 惑レ 俗小人を欺き迂うくなどある者と云く者と云。

汪シ 字ニ 俗小人性の拘泥さると云く者と云。汪

洋ハ 廣大の貌。

司馬長卿難蜀父老書。民人升降移徙。

李白詩。才高多感慨。道直無往還。

曲禮云。禮尚往來。

九傳宣公傳。吾儕小人。

吾儕

往來

銖シ 徒シ

銖シ 還シ

吾儕

正論

橫逆ハ

私ハ

慕ハ

童子ハ

童子ハ

童子ハ

諺

風改となりしぬは伏 西京雜記董仲舒云大平之世風不搖條新考王充論衡曰大平之世五日一風十日一雨風不鳴條雨不破塊のんとなりし

十家の家の

山ハクハクハクハクハクハク

宗法院

上と字ハクハクハク 孟子曰上有好者下必有甚焉者矣

尤傳臧武仲云夫上之所為民之歸也 後漢書云

吳王好劍客百姓多藏瘡楚王好細腰宮中多餓死

淮南子云靈王好細腰而民有殺食自飢越王好勇

而民皆處危爭死河上公云上行下必隨

壁ハク耳ハク 詩經小雅小弁之篇君子無易由言耳

属于垣事文類聚後集載姚元崇口箴其略云多言

多失多事多害聲繁則溢音希則大室本無暗垣亦

有耳 管子云古者有二言牆有耳伏寇在側新考

曷ハクハクハク 素問四氣調神大論云

譬猶渴而穿井又說此雜言篇譬言之猶渴而穿井

鳥ハクハクハク 太史公曰世言刑軻其稱太

子丹之命天雨粟馬生角也太過索隱曰燕丹來歸秦

王曰鳥頭白馬生角乃許耳丹乃仰天歎鳥頭即白馬

亦生角風俗通及論衡皆有此說 事文類聚別集還

鄉門引遊歷紀聞云燕太子丹為質於秦不禮乃求

歸秦曰待鳥頭白馬生角當放子歸太子仰天哭感得

鳥頭白馬生角秦王大驚遣丹歸應劭風俗通云據史

記為之鄉里俗說其實無此事原其所以有茲語者丹

寔好士無所愛悵也故閭閻小論飭戒之耳又和款

太子丹ハクハクハクハクハク

後守子からと伊く取らるるの事何やある
河よりハ河でるもの 俗よりくあると遊くものとい川
とらと云淮南子曰夫善游者溺善騎者墮各以其
所好及自為禍

河中よりとと人中小まき氏 白氏文集大行路云巫峽

水能覆舟若比人心是安流こ乃まき氏云

序口まき氏云とつけな 是ハ人の争論毀譽と行はるる

すていそれと云る前漢書鄒陽曰偏聽

生茲獨任成亂 魏徵曰兼聽則明偏信則暗是乃流

のまき氏云新考

疾ありまき氏云杜牧之詩云杜詩韓集愁

來讀似倩麻姑癢所抓

まき氏云進修のまき氏云 尤傳云民生在勤勤則不匱

陶淵明が為 説苑云力勝貧謹勝禍是乃まき氏云新考

郷に入りまき氏云 曲禮云禮從宜使從俗又云入竟而

問禁入國而問俗是乃まき氏云

まき氏云前漢書王吉傳百里不同風千里不同俗

まき氏云凡俗をまき氏云郷に入りまき氏云

俗よりまき氏云新考

神ハ心也の首まき氏云 倭姫世記云天照大神託

宣冥於加仁直奈留於以天本 登壽〇詩經小明篇云嗟

爾君子無恒安息靖共爾位好是正直神之聽之介爾

景福新考

鑰の穴まき氏云 天とのまき氏云 莊子云用管窺天用錐指地不

亦小乎 新考 説苑云以管窺天以針刺地所窺者甚大

所見者甚少是乃まき氏云

陰言ハるまき氏云 詩經邶風終風篇云寤言不

寐願言則嚏註云我甚憂悼而不能寐汝思我心如

俗語 可愛 人とて行むじ云詞之神代也 妍哉可
鳥鳴 修小鳥の鳴と云る 容齋隨筆
云北人以鳥聲為喜鵲聲為悲南人聞鵲噪則喜聞
鳥聲則唾而逐之至於弦琴挾彈擊使遠去
俗語 可愛 人とて行むじ云詞之神代也 妍哉可

鳥鳴 修小鳥の鳴と云る 容齋隨筆
云北人以鳥聲為喜鵲聲為悲南人聞鵲噪則喜聞
鳥聲則唾而逐之至於弦琴挾彈擊使遠去
俗語 可愛 人とて行むじ云詞之神代也 妍哉可

老しめしめいひぬと名ぬこり酒より男の女より何よと云
よしと云く可老といふと何やまうてかふゆきと云く
かひす 竹の物にふと仰字 蘇我のふらと云く
力と云るふやれ貝と云らんと云つばらめれ葉ふと
入ればむめらるるの何けと云ふきりすましと
一と云うと云ひと云ひと云く云れづんくめり
まらねけるちんそくをそく何なるひなのと云く
と云むしと云るちんそくをそく何なるひなのと云く
之来る一と云ふは流りやくなる 其貝と云く

我慢 法華經云我慢自矜高
史記項羽傳尚不覺悟
史記高祖記且日合戰
史記陳餘傳整頓其士
漢書宣帝記至于子孫終不改易
合戰 史記高祖記且日合戰
整頓 史記陳餘傳整頓其士
改易 漢書宣帝記至于子孫終不改易

瑕カキ 史記魯仲連傳出多亦作 瑕瑾作
降服カキ 左傳僖公傳云降服而囚杜注云去上服自

拘束以謝カキ 史記匈奴傳カキ 史記匈奴傳カキ 史記匈奴傳カキ 史記匈奴傳カキ

信カキ 信の字と云くカキ 信の字と云くカキ 信の字と云くカキ 信の字と云くカキ

神保カキ 詩經楚茨篇云先祖是皇神保是鄉食傳云楚

看病カキ 日本紀神功皇后記カキ 日本紀神功皇后記カキ 日本紀神功皇后記カキ

江帥カキ 江家次カキ 江家次カキ 江家次カキ 江家次カキ

苛察カキ 莫書文帝紀云文帝詔云以苛為察以刻為

明カキ 明令七罪者失職カキ 明令七罪者失職カキ 明令七罪者失職カキ

肝心カキ 五臟の中心の肝カキ 五臟の中心の肝カキ 五臟の中心の肝カキ

毫末カキ 老子云合抱之木生于毫末カキ 老子云合抱之木生于毫末カキ

簡畧カキ 韋應物初為尚書郎別集福精舍詩云簡畧非

世器委身同草木道遙精舍居飲水自爲足書言故事

行跡 宋書潘綜傳陳其行跡

開闢 楊子法言開闢以來

荷擔 法華經云爲如來有所荷擔俗小人之黨す

岩泉 俗小人の強健なるを岩泉と云。強而不定ると云ふ

傷 傷るる疾之又かり用く物の健なるを皆岩泉と云

強盛 強の字強盜と強壯なるを

搔首 詩經靜女篇愛而不見搔首踟躕今俗も物の象

合點 俗小人のと云なりて。毛の肯ふと合點と云。唐史

云屈突通仕隋文帝與漢王諒約若爾書召驗數字

加點則就道帝立召諒無驗諒覺變乞令りふ合

點乃まをれハ加點といふん

乞兒 深恨心念抄乞兒とかくいとよめる。伊勢物語小か

乞兒之依日記云。二乃ちらとらハ目と乞いハぬりふ

乞兒と何れ皆人と習初小用也乞乞人乞乞人

今俗小病病人と呼てかひと云ハ何れまより

渴仰 口乾くを渴仰と云。高山といはれぬ慕ふを

俗小渴仰と云。圍繞渴仰ハこころめらうて慕ふを

陰 晉書陸玩傳莫不陰其德宇又先祖の切方より

て辭と劔と蓋就と云。俗小人とれむるを蓋とれと

云。深女有茶をよれとよむかけ小くよ

河海抄

欠 物と算用と云。計がむく海平を欠と云。居家必

用註短欠謂正數不足也又曰折欠謂物料虧短者

加減 酒と暖むると云ハ加減の中界之茶と煮す

者、勤を加ると武大と。減あると文大と。一切の物
とある。一は加減何れか加減適中である。二は字、暖むじ
とある。中畧しと云ふ。煥と香と。三は字、金小
糸と熱は時、火加減。四は加減と云ふよりして、人々何や
また酒の加減の。中畧せる。五は字、能ある。六は字、向
の字、る。七は字、と云ふ。八は字、説文云、勤、校也。
勤、均と考ふ。九と云ふ。十は字、不。十一は字、不。十二は字、不。
馬、突也。るの久のつ。十三は字、不。十四は字、不。
我、他、彼、是、人の多く、何れも、推量ある。十五は字、不。
これ、何れも、推量ある。十六は字、不。十七は字、不。
く、と云ふ。十八は字、不。十九は字、不。二十は字、不。
は、く、何れも、推量ある。二十一は字、不。二十二は字、不。
ある。二十三は字、不。二十四は字、不。二十五は字、不。
のり、ある。二十六は字、不。二十七は字、不。二十八は字、不。
は、く、何れも、推量ある。二十九は字、不。三十は字、不。
合期、本朝文粹、大江、匡衡、文云、撫民治國、致合期
之、勤、東鑑云、進退未合期
假寐、詩經、小弁云、假寐永嘆、又左傳、宣公十四年
比肩、漢書、路溫舒傳、被刑之徒、比肩而立、又文心雕
龍、十卷、才畧篇云、傳毅、崔駰、光采比肩、又併肩の字、八、史記
早魃、詩經、雲漢篇云、滌々山川、早魃爲虐、朱傳云、魃、
旱神也、今俗も、旱魃と云ふ。又、早魃と云ふ。
愷樂、軍勝之樂、禮、大司馬、王師大獻、則令奏愷樂、

者、勤を加ると武大と。減あると文大と。一切の物
とある。一は加減何れか加減適中である。二は字、暖むじ
とある。中畧しと云ふ。煥と香と。三は字、金小
糸と熱は時、火加減。四は加減と云ふよりして、人々何や
また酒の加減の。中畧せる。五は字、能ある。六は字、向
の字、る。七は字、と云ふ。八は字、説文云、勤、校也。
勤、均と考ふ。九と云ふ。十は字、不。十一は字、不。
馬、突也。るの久のつ。十三は字、不。十四は字、不。
我、他、彼、是、人の多く、何れも、推量ある。十五は字、不。
これ、何れも、推量ある。十六は字、不。十七は字、不。
く、と云ふ。十八は字、不。十九は字、不。二十は字、不。
は、く、何れも、推量ある。二十一は字、不。二十二は字、不。
ある。二十三は字、不。二十四は字、不。二十五は字、不。
のり、ある。二十六は字、不。二十七は字、不。二十八は字、不。
は、く、何れも、推量ある。二十九は字、不。三十は字、不。
合期、本朝文粹、大江、匡衡、文云、撫民治國、致合期
之、勤、東鑑云、進退未合期
假寐、詩經、小弁云、假寐永嘆、又左傳、宣公十四年
比肩、漢書、路溫舒傳、被刑之徒、比肩而立、又文心雕
龍、十卷、才畧篇云、傳毅、崔駰、光采比肩、又併肩の字、八、史記
早魃、詩經、雲漢篇云、滌々山川、早魃爲虐、朱傳云、魃、
旱神也、今俗も、旱魃と云ふ。又、早魃と云ふ。
愷樂、軍勝之樂、禮、大司馬、王師大獻、則令奏愷樂、

司馬法曰得意則愷樂

艱難 書經無逸云稼穡艱難

豪傑 孟子滕文公篇云彼所謂豪傑之士也註豪

傑才德出眾之稱○淮南子云智過百人謂之豪

白虎通云賢萬人曰傑

填廓 楊升菴外集云六朝人尚字學摹臨特盛其

曰填廓者即今之雙鉤

荷負 尤傳曰古人有言曰其父折薪其子弗克負

荷之於後又の業所此を修ふるを負ふと云

今俗も代々流るる家と荷負の人荷負の家

邊鄙 張平子西京賦より注杜預尤氏傳注

云鄙邊邑也

友の志の麻とささるるをいふも心や此也

仲正

高聲 韓退之詩為我高聲謳

可畏 日本紀より

苟且 韻會云草率也

開基 魏何晏賦讐言天地開基並列宿而作制俗小

寺堂と創建するを基と云

夏 字彙云聲破也老子云終日號而不寤

固 月の令仲秋水始涸

閑居 孝經云仲尼閑居潘安仁有閑居賦

文中子云樂閑居

高位 孟子云仁者宜在高位

巧者 俗も物も巧なりと巧者と云句符一と拙者と云

一討より

雜 張平子西京賦云彌爾良雜苦 雜と右來かてと後

ふもり物とまじりて又上林賦も揉乃字と

